

佳作

キャンディー

金城 光政

銅褐色の一セントはアメ玉一個分
アメ玉は艶やかなオレンジ色
ピーナッツが練りこまれた三角形
リンカーンは一個のキャンディーであった
昭和三十年代のオキナワの子どもには
歯ごたえのある忘れ難い甘い塊
舌根の両側に残る味覚は甘美であった

そしてそれは
私の脳裏に焼きついたまま
なぜか今でも消えないままなのだ

そういえば
甘味を少しだけ長持ちさせる方法があった
それは即席のガムをつくること
原料はガジュマルの樹液
小石で太い幹を叩けば
流れ出る白い涙のような液体
そのどろりとした乳白色を若葉で受け
数枚の葉を天日に干せば

五分ほどで天然のガムになった

それは日焼けした皮膚のようであつたが
口腔粘膜に残る甘味と

奥歯にはさまれていたピーナツ片を
焦げたような苦味で絶妙に絡め取つた

ある年の夏休み

ぼくらはガジュマルを根城としていた
その大木は頑固な信念をもつて

廃屋の崩れかけた石垣を抱いていた
ガジュマルは静かな力を誇示していた

一家が全滅した廃屋の石垣の周辺には
そこから生まれ出たかのように

小型の砲弾やその鉄片が転がっていた
ぼくらはカタチの良いものを選んで

ガジュマルの傍らの池に投げ込んで
爆音とともに水柱が上がるのを期待した

しかし鉄の塊は濁った音を立てるだけで
池はいつのときにも沈黙を守つた

爆裂で仲間のだれかが死んで
翌日の新聞に報道されること

根城のガジュマルの写真が掲載されること
ぼくはそんなこと想像をしながら

鉄片が描く放物線の行方を追った
死んだっていい――

死は身近なものだと思っていた
漠然とした考えがぼくの心の隅にあった
仲間も同じような考えであった
だがだれも死にはしなかった
だから

だれも爆裂を目撃することはなかった
だれも死にたくはなかったのだ――

長い夏休みが終わっても

ぼくらはガジユマルに棲む生き物であった

ぼくらは相変わらずキャンディーを頬張り
ガジユマルの乳白色を採取し天日に干した
ぼくらの時間は確かに透明であった

その年の十月

かやぶき屋根の向こうから風が吹いて
区長の家の庭先あたりから
断続的なテレビ放送が運ばれてきた
ぼくらはガムを噛みながら

「ニッポン」から送られた

オリンピックの入場行進曲を聴いた
キビの穂が出揃う頃になっても

オリンピックの余韻は残った

「ニッポン」は疾走を始めていた
しかし

ぼくの周りでは何も起こりはしなかった

ぼくは樹上の生き物として

永遠にそこで過ごすことができる

樹上はそんな風が漂っていた

だれも無口であった

五十年の後の今

弾力の失われた空疎なガジュマルの樹液

吐き捨てたはずの苦味の残るガムを

私は今でも

変わらずに噛み続けていた

一セントのアメ玉

リンカーンが笑った二〇一四年の夏

私たちは今

さまざまな小型爆弾を懐に隠し持ち

抱く石垣もない観葉植物のような葉っぱに

その命を預けるようにして生きている

未来神話―

私は甘美な名残に酔っている

歯先のガムは捨ててしまおう

そんな時代は消してしまおう
吉田拓郎の歌が聞こえてくる
今日はそんな静かな夜だ